
温度

ひな乃

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

温度

【Nコード】

N18480

【作者名】

ひな乃

【あらすじ】

ちようどいい関係。

暑すぎても冷たすぎても成り立たない。

家族、恋人、友人との適温は何度くらい？

葉月

白っぽい壁が目に入る。

家具と言えば、小さな机とテレビという殺風景な部屋。

比較的、見慣れた風景。

また、寝ちゃったんだな、と葉月は思う。

今、何時だろうと思い、ベッドの上を手が携帯を追うがそれらしきものに当たらない。鞆の中か、と起き上がろうとするが、だるくて動くのがおっくうになってしまう。

「起きたの？」

と、不意に後ろから暖かいものに抱き込まれる。

その、悠介の低い声は眠気を含んでいた。

葉月がごそごそと動いたから起こしてしまったようだった。

「ユウちゃん、ごめんね。起こしちゃった。今何時かなって」

そう言うのと、ん、と後ろから葉月に回された骨っぽい体温の高い腕が目の前に出される。その手首にはめられた、某ブランドの時計が7時を指していた。

「何かどつかで食べてく？」

そう言いながら、腕は葉月からするりと滑ってしまい、温かいものが無くなってしまう。

それを少し寂しく思いながら首を横に振った。

「うっん。もう、帰らなきゃ。何だか最近睦月がうるさいから」

そう言うのと、悠介は、残念

「今日は、ご飯作らなくていいの？」

ハンドルを握り、悠介は前を向いたままだ。

悠介の車は、部屋と同じで余計なものが何も置いていない。性格が几帳面という訳では無いが、今置いてあるものは、葉月が置いたおなかのハートがかわいい某キャラクターのくまのぬいぐるみだけだ。それが、かたい雰囲気の中でやけに目立つように感じる。

それを横目で見ながら、寂しげだから仲間を持ってこようかなと思いながら答えた。

「うん。今日は、睦月が作る日だから」

でも、このぬいぐるみを置くときも嫌そうだったから無理かなと葉月は思う。嫌そうな顔をしながらも、葉月の手からぬいぐるみを取り、無造作に助手席側のフロントガラスの前に置いてくれた。そのときの悠介の慚然とした顔を思い出すと、葉月は笑いがこみあげてくる。

それから、そこがその子の指定席だ。

住宅街に入るととたんに暗くなり、ひっそりとした感じがする。ゆるやかな坂を登ってしまえば、すぐに葉月の家が見えてくる。家の前まで来ると、ハザードランプを悠介は灯した。

葉月は学校指定の鞆を持ちながら、寄つてく、と聞くと、悠介は、うーんと考える素振りを見せたが、

「今日はやめとくよ」

と、葉月に笑顔を見せた。

予測できた答えだったので、葉月も何も思わなかった。

最近、弟の睦月が、悠介が来ると不機嫌になるのだ。悠

葉月だから、いつも予定を合わせられるが、悠介が予定を入れてしまえば、次の週まで、会えないこともある。

ユウちゃんは会いたいと思わないのかな、と葉月は思ってしまう。自分は、いつも悠介の予定に合わせているのに、という気持ちが出してしまうのだ。

あからさまにがっかりしている葉月を見て、笑顔を浮かべて悠介が言った。

「その次の日ならいいよ。朝はしんどいから、昼からなら」

二日酔いになってるかもしれないけど、と言う悠介に気を遣わせたいと思うが、葉月は会いたい気持ちの方が勝って、寝ていた方がいいよ、何て言葉は出てこない。

ただ、思いの差を感じてしまうのだ。仕方なく自分に付き合ってくれているのかなと余計なことを考えてしまう。でも、次も会えるんだからと、葉月は笑って手を振った。

悠介の車を見えなくなるまで見送り、家へ入るとカレーのいい匂いが漂っていた。そして、予想通り不機嫌な睦月が待っていた。悠介と会っていた日は決まって機嫌が悪い。姉弟という間柄のせいか、葉月はそれほど気にならず、それよりも、いい匂いのするカレーの方が大切だ。睦月は、葉月よりもよっぽど料理が上手く、まめなタイプ。カレーだって、普通のルーだけではなく、葉月にはよく分からないがいろいろなものが入っている。

エプロンを付け、台所に立っている姿は学校の子たちが見たら大騒ぎだろうな、と葉月は思う。人当たりのいい睦月は結構女の子から人気がある。

「今日もユウちゃんと一緒だったの？」

と、その睦月の声はいつもの穏やかなものではなく、冷たさを含んでそっけない。

だ。

食事を事務的に口に運び、早く終わりたいと思う。

悠介と、ふたりきりで会うようになって、一年ぐらいになる。

ユウちゃんこと、悠介は葉月の十歳年上の幼馴染で、大学入学をきっかけにひとり暮らしを始めたが、それまではずっとお隣さんだった。小さい頃は、遊んだというより、双子の弟の睦月とまとめて面倒を見てもらっていたという方が正しかった。葉月から見た悠介は、いつも優しいお兄さんで、睦月と喧嘩をしたときは悠介に泣きついてかばってもらったり、我儘を言っても笑って聞いてくれる、間違っても葉月の前では動揺したりなどしないような人だった。

こういう関係になっても悠介の態度は相変わらずで、どういう気持ちで付き合ってくれているのかなと考えてしまう。

あの日、どちらからともなく唇を合わせてから。

母が亡くなってしばらくたってからの事だった。自分の部屋でふさぎ込んでいた葉月を悠介が慰めに来てくれた日。

悠介はスーツにネクタイを締めていて、会社帰りに寄ってくれたんだと思う。

何も聞かずに笑顔を浮かべて、手には茶色いリボンの白い箱を持っていた。

「ケーキ食べる？」

と、悠介の変わらない笑顔を見たら気がゆるんで、無意識に抱きついて泣いていた。それに動じることなく、短い時間ではなかったはずだが、ずっと葉月の髪をなでていてくれた。

感情がおさまると恥ずかしいことをしたと思い、顔をあげたら、以外にも悠介の顔が近くにあり、気付

キをふたりで食べた。

次の日もその次の日もケーキを持って悠介は現れた。何度もキスをした。何日目かの帰り際に外で会う約束をした。外で食事をして、帰り際にやっぱりキスをした。葉月は幸せだった。

たとえ悠介が慰めてくれたただけだったとしても。今は、まだこれでいい。

だって、ずっと悠介のことが好きだったから。

睦月

書きなぐるようなチョークの音。

黒板には細かい文字で、びっしりとアルファベットが書かれている。

「この例文が分かる者は」

誰も答えない。

「では、この答えは、」

すぐに解説を始める。

木田の授業は誰も聞いていないが、本人も気にしていない。淡々とひとりで喋るから、進みが速い。黒板もすぐ白い英文で埋め尽くされ、空気が無くなるとすぐに消してしまう。そのため、テスト時には驚くほどの範囲を出してくる。そのペースの速さにすぐにあきらめてしまう者、最初から聞いていない者、一生懸命にノートを取る者と様々だが、あきらめているものの方が多いように思う。

睦月は、木田の授業が嫌いではない。教師としては生徒を置いていく授業はよくないだろうが、ペースが速いため授業に集中できるのだ。寝ている奴も多いが、授業を真面目に聞いていればテスト時に焦ることはないと思っている。現にそうして睦月はいい点を収めていた。

しかし、今日はいつものように集中できない。

あのロリコン野郎のせいだ。

無言でカレーをほおばる双子の姉を思い浮かべる。車の音がして、玄関を開ける音がしたということは、また悠介と会っていたのだろう。最近悠介は、家へ入ってこようとはしない。睦月には思い当たる節があった。

「睦月くん」

と、隣からひそめた声。双子の葉月が同じ学校にいるせいか、睦月は名前で呼ばれることが多い。

いつもと違う黒ぶち眼鏡をかけている湊が黒板をにらみながら聞いてくる。やる気がうせた睦月はノートごと湊に渡してやる。一瞬驚いた風な顔を見せたが、小声でありがとうと言った。

隣の席の湊は真面目だと睦月は思う。どの授業もしっかりとノートを取っている。みつあみに眼鏡という風貌がそう見せているのかもしれないが、自分と同じように考えているのかなと睦月は思う。彼女が授業に集中していないところは見たことがない。机にかけている鞆は膨らんでいて重そうだし、教科書やらノートをちゃんと持ちかえているのだろう。

前の席の沈没しているでかい体の男とは、えらい違いだ。でかい体の森は、前の授業の体育で体力を使い果たしたのだろう。本人いわく、部活をするために学校へ来ているらしい。

「睦月くん、ありがとう」

そう言つて、湊がノートを返してきた。いつの間にか授業が終わっていたらしく、黒板はきれいに消されている。木田はいつも自分で黒板を消していく。写し切れていない生徒がいるのも分かっているのに嫌味な教師だ。

「眼鏡どうしたの？」

と聞くと、朝割っちゃつて、と少し照れながら湊が答えた。古い眼鏡を出してきたが、度が合わなくて困っていたらしい。

「この眼鏡大きすぎるのよ」

かつこ悪くて嫌なの。おまけに重いし、と湊が鼻にしわを寄せて眼鏡を持ち上げる。似合うと思つたが、その言葉を睦月は呑み込んだ。「何か嫌なことでもあつた？」

湊は、何でもないような顔をして、筆箱にシャーペンをしまつていたが、睦月の驚いた顔を見て、虚を突かれた表情を見せた。

「あ、ごめんごめん。何かいつもと違うなっと思ったから。ほら、隣の席だし」

睦月の表情を見て、焦ったように湊が言って、友達のところへ行ってしまった。

「湊ってさ、お前のこと好きなのかな」

いつの間に起きたのか、前の席のでかい男、森が言った。

湊が好きなのは森だろ、と思ったが睦月はふーんと気のない返事を返しておいた。本人に聞いたことはないが、よく森をぼんやりと見つめている。

信じてないだろー、と言う森は楽しそうだ。

「萌えって感じたよな」

は、湊のことか。

「でかい眼鏡でよく分んなかったけど、近くで見たら目とかでかいし、童顔なのに胸とかでかいしさ」

なあ、と嬉しそうな顔で、メイドとか似合いそうじゃねえ？と言う森を睦月は放っておいた。たしかにと思うが、教室ででかい声で言われても睦月は困る。

こんなやつだが、森は結構もてる。濃い顔は好き嫌いが分かれるとは思うが、彼女が途切れたことがない。曰く、ひとりになると寂しくて死んでしまうらしい。でかい体をして甘え上手なんだろうな、と睦月と思う。以前見かけた彼女らしき人も、年上っぽかった。

「葉月ちゃんとはタイプ違うけどいいよなあ」

「何で、葉月が出てくるんだよ」

「いやあ、何か睦月と葉

十も離れている女子高生を相手にするわけがないのに葉月はそれが分からないのか、と睦月は思う。実際に、隣に住んでいたところに、家へ連れてきていた彼女は、睦月が会うたび違う女の人だった。しかも、葉月とは全然タイプの違う派手な美人ばかりだった。もう、葉月が落ち込む姿を見たくはない。

「あ、うわさをすれば」

教室の入り口を見ながら森が言った。少し顔をのぞかせた葉月と目が合うと、小さく手を振り、こちらへやってくる。昨日からまともに話していないので、気まずいのだろう。

「英語の教科書貸して。忘れちゃったの」

こちらを窺うように葉月が笑って言った。

「俺も持ってない」

そっけなく返すと、森が慌てて、ちよつと待って俺持ってるかも、と後ろのロッカーを探しに行く。ちなみに森のロッカーは魔窟状態だ。

葉月は無表情。

「はい、どーぞ」

横から教科書を出してきたのは湊だった。葉月は驚いたようだったが、お礼を言って教室から出て行った。その間、睦月の事は一度も見なかった。

「睦月くん、持ってたじゃん」

隣に座った湊が呆れた顔をしている。木田の授業があつたばかりだ。「ケンカでもしたの？」

しよがない奴、とでも言う湊の表情。確かに、子供じみた事をしてしまったのは、分かっている。

さっきのは

いかも」

黒ぶち眼鏡の大きな瞳が優しく微笑む。

「趣味……？」

「うん、ほら何だかいいかんじに見えるから」

湊が言っていることは、よく分からないが、仲直りしろってことで、やっぱり自分が子供じみているようで恥ずかしい。

「ただの、姉弟喧嘩だから」

でも、どうも。と返しておく。

「あ、もちろん、森くんと一緒のところも好きだから」
なぜかそこを湊は強調した。

仲直り。分かっている、自分がひとりで怒っているだけだ。

——このシスコン。

悠介の面白がる声が聞こえてきそうだ。自分は、ロリコンのくせに。幼馴染だし、悠介が葉月に対して、不真面目な気持でないことも睦月は分かっている。

母が亡くなった時だった。

母が亡くなった時、葉月は一緒に乗り越えようとはしなかった。父は、相変わらず仕事で帰りは遅いが、休みはしっかりと家族サーブスをするようになった。遊園地、動物園、海、釣り、父の提案は中学生の睦月たちには不釣り合いの場所だったが、嬉しかった。睦月も料理をするようになった。家族がそれぞれ言葉には出さないが、乗り越えようとしていた。葉月を除いては。

食事も取るうとしない葉月を心配して、悠介に相談したのは父だった。すんなりと外へ葉月を連れ出した悠介に感じたのは、嫉妬。なぜ、家族以外

り否定する。

仲直りに葉月の好きなロールキャベツでも作ってやるか、と材料を算段してみる。でも、こちらが、一度葉月からのサインを蹴っているので、食べないかもしれない。大人しそうに見えて、けっこう葉月は頑固だから。

森は、ようやく教科書を引っ張り出してきた。葉月がいないことに大げさに悲しいというリアクションをするが、睦月は冷たく返す。それを、楽しそうに湊が眺めている。睦月は、考えないようにしておく。

湊の鞆から覗いている雑誌の表紙が裸の少年同士の絵に見えることを。

理華子（前編）

好きなものは残しておくタイプだ。

たとえば、ショートケーキならいちごは、最後まで残しておく。好きなドラマなら、録画して後で見る。

好きなものは、後のお楽しみに。

それは、白石理華子の子供のころからのくせだった。

「そういう人って、大事なことを後回しにしがちだね」

入社したばかりの同期の飲み会だった。正面に座った夏目悠介がそんなことを言った。

好きなものを先に食べるか後で食べるかという、意味のない話だったが、ただ、みんな酔っ払いだったため、そんな話でも盛り上がっていた。

「そういう夏目くんは？」

「そりゃ、ちょうどいいときに食べるタイプ」

どっち派がいいかという無意味な論議をしていた周りも、その言葉を聞いて、はいはいと話は、会社の噂話に変わった。

たわいのない与太話。しかし、その言葉は何故か理華子の頭に残り、何かあるとひょっこりと顔を出すようになってしまった。

「理華子さんコピー取れました」

「ありがとう。これ、次の会議で使うからそれぞれまとめてホツチキスでとめてくれる？」

はい、と良い返事をする野村の男のくせにつるつるとした肌を見て理華子は若いな、とつい思ってしまう。新人の指導係なんて面倒だと思っていたが、イマドキの若い子という感じで、物怖じ

いるようだった。上司に無理やり飲まされて、酔っぱらった挙句、からんで言いたいことを言う野村を理華子は何故か止める羽目になり、その後、トイレで吐き、帰りは道端で寝ようとする野村を理華子はパンプスで何度も蹴って起こしてやったのだ。ちなみにその後は、しばらく野村をパシリとして理華子は使っていたが。

「そう言えば理華子さんって、何でもんな名前で呼ぶんですか？課長とか呼び捨てじゃないですか。最初びっくりしたんですよね」

野村が白い歯を見せて笑う。

ひとつ息を吐いた。

「前に同じ名字の人がいたからね」

「白石課長つか」

知ってるんじゃない、と理華子は思ったが何も言わずに頷くだけにしておいた。

「理華子さんと白石課長って」

そこまで言いかけて、青木は口ごもった。理華子は、まだまだ少年っぽさが残る口元を見た。

——もしかしたら、あの噂を知っているのかも。

瞬間、ひやりと背中が寒くなった。

斜め前の席の夏目が理華子を見ている気がしたが、顔は上げられなかった。青木の声が大きいのだ。

「あなた、コピーくらいまともにとれないの」

さらに大きな声がいらだちを含んで後ろの席から聞こえてきた。

振り向くと、新人の中瀬が教育係の山田に怒られて

「青木くん、資料の順番間違えないでよ」

と言い残し、理華子は席を立った。後ろから、はいという青木の元気な返事が聞こえてくる。

大丈夫だ、と心の中で唱えた。

——もう、終わったことだから。

そう考えると平常心が戻ってくる。

考えなしに席を立ったが、すぐに戻ると怪しいなと思い、せっかくなのでコーヒーぐらい飲もうと自販機へ足を向けた。ついでに、青木へも買って行ってあげようと理華子は思った。

オフィスを出るとたにに静かになる。熱気も違い、廊下はひんやりとしている。すれ違う人もまばらで、理華子もお疲れ様ですと挨拶をして通り過ぎた。

理華子は自分用にブラックコーヒーを買い、もうひとつは炭酸飲料にしようか甘いコーヒーにしようか迷う。

青木はブラックは飲めないらしく、いつも甘そうな物を机に置いていた。

すると、横から自販機のボタンが押されて、驚くと夏目だった。

「びつくりした」

と言うと、何も言わず長身をかがめて夏目は、取りだし口から理華子と同じコーヒーを取りだした。

「気配消してきたから」

にいと笑う。

ん、と言ってポケットをさぐり、小銭を理華子の手にした。

「青木には、会議室のセットを頼んでおいた」

</

いのプライベートを知っている。最初は飲み友達だったが、話しやすく口が堅い、そして余計なことを言わないというのが相談相手にはぴったりだったのだ。

「青木くん見てるとさ、ついイマドキの子って思っちゃうんだけどくっくつと夏目が笑う。」

「おかしい？」

「だって、自分はいくつだよ」

理華子には、青木も中瀬も、別の世界の人に見える。たった五つしか変わらないはずなのに。

そういえば、夏目の彼女は十も年が違はずだ。話は合つのだろうか。

「葉月ちゃん元気？」

「うん。だけど、中間考査があるから出入り禁止にしてるけど何てことないように言い、ひとくちコーヒーを飲んだ。」

理華子は今では冷静に聞けるが、最初は驚いて止めたものだった。十も年下の女の子なんて、しかも相手は学生。まさか、夏目がそういう子を選ぶとは思いもしなかった。今でも、中間考査という言葉を聞くと、理華子の方が悪いことをしているような気分になる。

「いい彼氏さんですね」

理華子がからかうように言うと、

「じゃないと、弟くんが怖いからね」

ふざけて夏目が返す。

葉月ちゃんには、双子の弟がいるらしく、その弟くんは夏目はこっぴどく嫌われているらしい。そんなことを聞いてしまったのは、理華子としては面白くてたまらない。社内

いつの間に飲んでしまったのだろうか、夏目の手から弧を描いて缶はくずかごに吸い込まれていった。

理華子はまだ、手の中にある小銭を握りしめ、首を横に振った。それを横目で見て夏目は安心したような表情をした。

夏目の表情を見て、ごめん、と心の中で思う。

——白石課長。

温和な笑顔が浮かぶ。優しい大人の男性というイメージとは反対に、言うことは辛辣。仕事には厳しい人で尊敬もしていた。

だから、誘われた時もすぐに断れなかった。

奥さんも子供もいることは分かっていたのに。

白石課長は、そういう気だったことは分かったが、やんわりと理華子は避けてきた。会わない方がいいと思いつつも、大事なことを後回しにしてしまう理華子の悪いくせが出てしまい、次に会ったときこそ、と思いつつずるずると会い続けてしまった。

でも、食事をして、ただ、それだけ。

それを会社の誰かに見られて、いつの間にか噂になってしまった。

白石課長と白石理華子是不倫をしている、と。

噂が流れると白石課長は、理華子を避けるようになり、部署を異動して、それっきりだ。

連絡もいつさい無い。

噂は、尾ひれがついて酷いものもあり、会社へ来るのが怖くてたまらなかった。

でも、残された理華子を感じたのは、寂しいという気持ちの方が大きかった。

きつと、惹かれていた

理華子（後編）

「夏目さんって、彼女とかいるんですか？」

新人の中瀬が、ボブを揺らしながら首をかしげた。たつぷりとマスカラが塗られた重そうな睫毛に囲まれた瞳は、期待をするようにくるりと動く。

昼過ぎのオフィスは閑散としており、どこかまつたりとした空気が流れていた。夏目の席をちらりと理華子は目をやるが、どうやら外出中らしい。

「いるみたいよ」

女子高生の、と心の中で付け加える。

えー、そうなんですかあ、と中瀬の媚びるような間延びした声は、残念がるような響きを含んでいる。

「それってえ、もしかして理華子さんだったりします？」

中瀬の瞳が鋭くなったように理華子は感じた。

「よく、飲みに行ったりとかして、仲いいですよね」

また、勘違いされる。

そう思い、理華子は笑顔を作った。

「同期だからね。夏目くんの彼女の話もよく聞くし。よかったら今度は中瀬さんも一緒に行く？」

「あ、俺も行きたいです」

元気のいい声が後ろから聞こえて、ふたりで振り向くと青木が缶コーヒーをもつてにこにここと笑っている。

いつにします？と青木が嬉しそうに言うので、理華子も合わせて夏目に聞いておくと答えた。

中瀬を見ると、邪気のない顔で笑っている。

悪意を感じるが、なぜ自分にそれを中瀬が向けるのか理華子には分からなかった。

「そう言えば、山田女史が中瀬を捜していたけど」

早く行かないとまた怒られるんじゃない？と青木の不機嫌な声。

中瀬は顔をしかめて、うるさいんだよねえ、と口にしながらも理華子のそばから離れて行った。

青木は何も言わず隣に座り、パソコンをいじり始める。

——ふたりとも知っているんだ。

そう思ったら、鳩尾の辺りが重くなり、理華子はそつと手を当てた。

——社内はこりこりですよね。

中瀬の言葉が頭に響く。

たしかにその通りだ。

もう、あんな思いはしたくない。

何もなかった、という顔で通したが、陰で噂をされているのと思ったら、本当に怖かったのだ。

会社も辞めようとまで思った。

「このまま辞めたら、噂を肯定することになるんじゃない？」

そう夏目に言われて思いとどまったのだ。白石課長が異動になって居やすかったということもある。

理華子が堂々としていたこともあり噂は次第に収まっていったのに、まさか新人の子たちが知っていると、思いもしなかった。

ひとつ

青木がぼつりとひとり言のように言う。

「え？」

「夏目さんとか敵わないじゃないですか」

あいかわらず、青木はパソコンを睨んだまま。

ひとつ、息を吐いた。

「本当に、気付いてなかったんすね。」

みんなには、バレバレなのにと呟く。

「俺、理華子さんの人に蹴りいれるぐらい強気なくせに、その割には、へんに真面目なところとか結構好きですよ。結構っていうか本当に」

幼さを残す青木の顔は赤く染まっている。

理華子も我に返り、周りを見渡す。誰かに聞かれたら大変なことになる。幸い、誰もふたりを見ている者はいなさうだ。

「ちよつと、青木くん。こんなところで何言ってるのよ」

小声で凄んでみる。

よほど、すごい表情をしていたのか、青木の体は自然に後ろへ引いていった。

「だって、社内がこりこりって思われてるんだったら、早めに気付いてもらわないと。俺、即行動派なんです」

と、口をとがらす。

理華子は、頭が痛くなってきた。

だいたい、蹴りを入れられて好きだというのは、青木はMなんだろうか。そもそも、こんな社内でも自分のデスクで

理華子の目の前の夏目は、お腹を抱えて笑っていた。

会社帰りにふたりで寄った居酒屋は、平日ということもあり比較的
空いている。照明を落としたこじんまりとした店内は、理華子たち
も含めて3組しかお客がいない。

夏目に青木のことを話していたら、長く喋っていたため、グラスに
水滴がいくつも浮かんでいた。

「それで、どうなったの？」

夏目には話がツボだったらしく、面白そうに聞いてくる。

「今度遊びに行こうって」

少しも話を聞こうともせず、開き直った様子の青木を理華子は思い
浮かべた。

夏目はにやにやと笑っている。

「で、どうするの？」

別に青木のこと嫌いという訳ではないので、嬉しくないと言えば
嘘になるが、どうも付き合う想像ができない。

「結局決められずに、理華子が知らない間に付き合ってる」

青木の押し勝ちになりそうだな、と夏目が予想というか、断定する
ように言った。

理華子は、くやしいけど自分でもありそうだと思ってしまう。

でも、もうあんな思いはしたくない、そう思い押し黙った理華子を
見て夏目が口を開く。

「言っておくけど、あれは課

全然、オツケイっすよ。

その言葉に理華子の心が動いたことを青木が知るのはいささか先のことになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1848o/>

温度

2010年10月25日17時07分発行